

『まるごと 入門』のコースデザイン —制限された時間での効果的な日本語学習への試み—

金 愛子

ソウル日本文化センター

1. はじめに

国際交流基金ソウル日本文化センター（以下、ソウルセンター）では、一般日本語講座（以下、日本語講座）を前期、後期の2期に分けて開講している。

ソウルセンターでは長らく上級・中級講座のみを開講してきたが、『まるごと 日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）が開発され、まず2013年7月にパイロット講座として5日間（180分×5回＝15時間）の入門（A1）レベルの短期コースを開講した。しかし、当時の講座編成などの理由で、パイロット講座直後の入門コースの開講は実現しなかった。

その後、2014年10月に「まるごと日本語入門コース」（以下、2014年入門コース）を開講したが、同コースは、1回きりの講座として、通常日本語コースとは異なる、特別な枠組みで実施され、次のコースへの進級は想定されていなかった。しかし、2014年入門コースの修了生のコース継続を望む声と、ソウルセンターの日本語講座の改編^①とが重なり、2015年3月より上のレベルに進級していくことを想定した「まるごと日本語入門コース」（以下、2015年入門コース）が開講された。しかし、教室や教師の数など物理的な制限より、毎学期すべてのレベルを開講することができなかつたため、前期には入門と初級2、後期には初級1と初中級を開講というように、入門から初中級までは半期ごとに申請や登録を行い、レベルを上げて受講していけるコースとした^②。

本レポートでは、2014年入門コース実施の成果を踏まえてデザインされた2015年入門コースを報告することで、ソウルセンターの特色を生かした、より良い授業のためのコースデザインは何かを探ることを目標とする。

2. 2014年入門コース

これまで韓国の一般成人の日本語教育では、就職や昇進のため、日本語能力試験（Japanese Language Proficiency Test, 以下、JLPT）合格を目標とする学習者が多かった。しかし、最近では趣味の一つとして日本の社会や文化に対する直接的・具体的な関心が学習動機となっている傾向が見られる。そのような傾向は2013年7月に実施したパイロット講座の結果からも一部確認することができた。本章では、まず、2015年入門コースの実践背景となる2014年入門コースについて報告する。

2.1 コースの概要

2014年入門コースは、日本の文化に興味を持ち日本語を気軽に楽しく勉強してみたい人のためのコースとして実施された。今まで日本語を全く勉強したことのない人（以下、未習者）を対象とし、『まるごと 入門』『かつどう』編（以下、「かつどう」編）（試用版）のみを使用したクラスで、『まるごと 入門』『りかい』編（以下、「りかい」編）を使用するクラスは設けなかった。また、文字の導入も行わなかった。時間数は週1回180分の授業を1学期10回行い、1学期間で「かつどう」編を終わらせた。2014年入門コースは、ソウルセンターの日本語講座からは独立したもので、文字学習をしなくても日本語が勉強できる、日本旅行に行く際に簡単な会話ができるなど、『まるごと』のコンセプトを生かしたコースとして位置付けられていた。

本コースの基本情報は、表1の通りである。

表1：2014年入門コースの基本情報

実施コース名	まるごと日本語入門コース（A1レベル）
期間	2014年10月16日～12月18日
授業時間	90分@1コマ、1回2コマ（180分）、週1回×10週＝10回（14：00～17：00）
授業担当講師	報告者
1クラスの学習者数	15人
学習者の属性	性別：男性3人 女性12人 年齢：20代1人、30代7人、40代2人、50代4人、70代1人 職業：大学生1人、大学院生1人、講師2人、主婦5人、その他5人
使用教材	『まるごと 入門』『かつどう』編<試用版>
到達目標	① 日常よく使われる基本的な表現を使って、たとえば飲み物や食べ物などを注文することができるようになる。 ② 自分や他の人を紹介することができ、たとえば家族について人数やどこに住んでいるかなどについて質問したり答えたりすることができるようになる。 ③ 相手がゆっくり、はっきり話して助け舟をだしてくれたら簡単なやりとりができるようになる。

本コースは、募集時に未習者向けのクラスであると明記していたにもかかわらず、既習者が多く集まってしまった。受講生15人中11人が既習者で、未習者は3人のみであった（1人は1回目で途中辞退したため不明）。既習者11人の学習歴の内訳をみると、3人は高校で第2外国語として（2人は1年、1人は2年）、4人は大学や民間の教育機関で（1か月～6か月）、1人は韓国人からの個人レッスンで（10回未満）、3人は独学（初級教材で平仮名を読む程度）であった。高校で2年間の学習歴を持つ既習者1人は、JLPTのN3合格者であり、募集当時のコメント欄に「日本語の実力が全く伸びないため、基礎から学びたい」という希望を書き記していた。その1人を除く14人は募集当時に未習者と記入していた。

受講生の学習動機は、「日本旅行の経験がきっかけになった」2人、「日本語の勉強のため」3人、「仕事のため」4人、「日本文化に興味がある」2人、「日本旅行のため」4人であった。受講生の中には、本コースが「文字学習」より「聞く・話す」中心の授業のため申請したという

人も4人いた。開講時の受講生数は15人で、終了時の修了者数は10人であった(5人はコース途中辞退)。修了者10人のうち2人は開講時に未習者であった。

2.2 授業内容

2014年入門コースでは、「かつどう」編(試用版)を使用し、1課から18課まで学習した。週1回180分の授業を10回実施し、毎回1つのトピックを終わらせるようにした。1回目に韓国語によるオリエンテーション、最終日に全体のふりかえりを行った(表3を参照)。

1回目のオリエンテーションで文字学習をしないことを説明し、トピック1の第2課「ひらがな・カタカナ」ではローマ字の読み方を確認した。2.3節で後述するように、日本語と韓国語は音韻体系が異なり、日本語の「語頭の有声音」「ザ行音」「ツ」「特殊拍」などは韓国語では表記できない。そのため、韓国語を母語とする日本語学習者(以下、韓国人学習者)には、それらを類似した韓国語の音声に置き換えて発音する学習者が多い。2014年入門コースの既習者にも同様の傾向が目立ったため、ローマ字読みを意識し発音するように注意した。

6回目(中間)と10回目(期末)に、一人5分程度の会話テストを実施した。しかし、本コースは次のコースへの進級を想定していなかったため、テストというよりは教師が学習者の目標Can-doの定着度を知るために行った。学習者には会話テストではなく、学習項目の確認として中間と最終日に日本語で「やりとり」する時間を設けると伝えた。会話テストの質問は、3つのトピックを合わせたものにし、教師との交流会話形式で一人ずつ行った。テストの評価は3段階で行い、報告者1人が担当した。テストの結果は成績に反映させず、出席率70%以上のみをコースの修了条件とした。

図1は、2014年入門コースの授業の進め方を9回目の授業を例として示したものである。

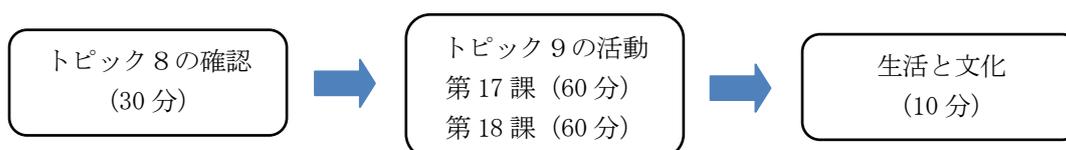


図1 2014年入門コースの授業の進め方(9回目の例)

図1で示したように、毎回の授業前半30分間は、前回のトピックの活動内容を振り返りながら確認する時間(以下、「確認」)を設けた。それは、各トピックの学習内容を定着させるためである。「確認」の後、課ごとの目標Can-doを達成させるために行う活動の時間(以下、「活動」)、各トピックの終わりに日本の生活と文化について思ったことを韓国語で話し合う活動の時間(以下、「生活と文化」)の順に教室活動を行った。教室活動は、「かつどう」編の内容に沿って実施したが、「読む・書く」Can-do項目は省略した。また、セッションごとに休憩時間5~10分を入れた。

以下は、9回目のトピック8の「確認」の具体的な進め方を示したものである。

【15 課の確認】 <「かつどう」編>

- ・ 語彙や表現などを確認する。
- ・ ①の会話表現を確認する。「だれにあげるか、なにをあげるか」
- ・ ②の会話表現をペアで発表する。「買いたいものについて、ほしいものはどこで買えるか」

【16 課の確認】 <かつどう編>

- ・ 語彙や表現などを確認する。
- ・ ①の会話表現を確認する。「サイズがあるか、もっと安いものがあるか、ほかの色のもがあるか」
- ・ ②の会話表現をペアで発表する。「店で買い物をする」

「確認」では、トピック8の目標 Can-do を確認し、語彙や表現、会話例などを確認した。文字指導を行わなかったため、スライドの絵を見ながら、全体で確認する形式となった。

授業の最後に「生活と文化」を設けたが、時間の都合上、毎回写真を見ながらみんなで簡単に話し合う程度で終わった。授業開始前に「Can-do チェック」表（韓国語訳付き）を配布し、毎回授業の終わりにチェックし、コメントを韓国語で書かせるようにした。しかし、振り返りやチェックのための十分な時間が取れず、課題にさせるときもあった。

2.3 成果及び問題点

まず、最終日に行ったアンケート調査の結果（資料1を参照）をみると、「教材」や「授業全体の進め方」については、学習者からの評価は概ね高く、肯定的な反応が返ってきた。「文字学習」を希望する学習者が10人中7人で多かった。また、回答者全員が「日本語学習の継続」を希望し、入門レベルだけのコースに対しての不満もあり、受講生から受講継続の要望の声が大きかった。また、回答者全員が「このクラスを他の人にすすめたい」と回答した。その理由の中で（資料1では割愛）、特に既習者2人（高校で2年間、民間の教育機関で3か月間の学習歴を持つ）は、それぞれ「このコースを通じて初めて発音と会話の基礎を固めることができた」「受講前は文字・文法学習が困難だったが、文字より会話中心、特に生活会話と発音中心の授業は素晴らしい方法だと思う」と記入し、授業で「聞く」活動やローマ字読みを意識することが日本語の発音学習に有効であると述べた。さらに、日本の文化に対する関心が高く、「生活と文化」の中でもっと質問できる時間があればよかったという意見があった。

次に、中間と期末に実施した会話テストの結果では、ともに1人を除く学習者全てが課題の60%以上が達成でき、合格レベルであった。しかし、中間会話テスト（トピック1～5、9人参加）より期末会話テスト（トピック6～9、10人参加）の方が達成できていない項目が多かった。また、期末会話テストの場合、直前に学習した項目は達成できたが、それ以前の学習項目は、達成できていない項目が多く、直ぐに答えられない学習者や、質問が聞き取れていない学習者もいた。後半になると、語彙数も多くなってくるので、学習負担が大きく毎回の学習項目が十分に定着していなかったと考えられる。

学習者からは「本コースに参加して文字を知らなくても日本語でやりとりができることが分かってよかった」という声が多かった。また、既習者のほとんどが、本コースを受講する前は、文字や文法学習の負担が大きく、興味を失い学習が停滞していたと言っていた。しかし、既習者の多くは、「話す」活動がうまくできず、文法・文型についての質問に集中していて、「文法中心」「教師中心」の既存の学習方法から抜け出すことが難しいという傾向がみられた。一方で、未習者2人は、「話す」活動は活発にできていたが、「コースの後半になって語彙や学習内容の量が多くなり負担を感じている。自宅で思い出せないため復習ができない」と話していた。

学習者の日本語の発音についても成果がみられた。日本語と韓国語は、文構造、語彙など類似している面が多いため、韓国人学習者にとって日本語は習得しやすい外国語と言われる。しかし、音声面では相違点が多く、発音の面においては問題点が多い。松崎（1999）は、韓国人学習者には日本語発音の習得について様々な困難点があると指摘し、「有声・無声音の区別」「ザ行音」「ツ」「特殊拍」などの発音の問題点を挙げている。しかし、未習者2人にはこのような発音の誤りは見られなかった。それは、ローマ字読みを効果的に使用し、日本語を聞くことに集中して行ったため、韓国語の類似した音声に置き換えることなく、正しい日本語の発音の定着に役立ったと考えられる。また、既習者の中にも「聞く」活動やローマ字読みを意識し発音の誤りが改善できた人がいたが、その数は少なかった。

3. 2015年入門コース

2.3節で述べたように、2014年入門コースの学習者からは「文字・文法がわからないため、教室外では授業内容が思い出せず振り返りできない」という「学習項目の理解及び定着度に関する問題点」を挙げる声が多かった。このような学習者の声を受けて、学習内容を定着させる効果的な授業のために、授業内容をどのように変更すればいいかを考えた結果、2015年入門コースでは「文字指導」を取り入れ、「りかい」編を用いた「確認」を実施することにした。本章では、2015年入門コースについて報告する。

3.1 カリキュラムの作成

本コースで、「文字指導」と「りかい」編を導入することにより、コース実施期間の延長など新しいカリキュラムを作成することになった。カリキュラム作成にあたり、報告者とソウルセンターの担当者が意見交換をしながら以下のようにカリキュラムを作成した。

(1) 授業時間及びコースの実施期間	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業数は2014年入門コースの10回(週1回180分、10回=30時間)を15回(週1回180分、計45時間)に増やす。 ・ 実施期間は2015年3月～6月とする。
(2) 到達目標と教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・ 到達目標はJF日本語教育スタンダードの「A1レベル」を想定し、「聞く・話す」活動を中心とする。 ・ 主教材として「かつどう」編を使用し、副教材として「りかい」編を使用する。 ・ 「りかい」編は、文字学習、教室活動後の学習者の復習で使用し、「確認」で取り入れる。
(3) 教授内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 到達目標に合ったコース全体の学習項目を決める。 ・ 「かつどう」編は、1課から18課までの全トピックを取り扱い、「読む・書く」Can-do項目は省略する。 ・ 「りかい」編は、「文字と言葉」「会話と文法」項目のみ扱い、「書く」「漢字を読む」「読解」「作文」「日本語チェック」項目は省略する。 ・ 文法説明は「りかい」編を利用し、「確認」のみで行う。 ・ 「文字指導」はトピック5の終了後に取り入れる。文字の確認は「平仮名」のみにする。
(4) 授業の進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業では、教科書の内容をパワーポイントに映し出し、語彙の指さし確認以外の活動はパワーポイントを使用する。それは、時間の短縮と学習者を一点に集中させるためである。 ・ 授業の始めに30分間の「確認」を設け、前回のトピックの学習内容を確認する。
(5) 評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中間(10課終了後)と期末(18課終了後)に会話テストを実施する。会話テストは、「かつどう」編の3つのトピックを合わせたものにし、教師との交流会話形式で行う。評価は3段階で行い、課題項目が60%以上達成できたら合格にする。 ・ 文字テストは、文字学習の確認のため、期末のみに実施する。「かつどう」編にある「平仮名」の短い文章から選び、60%以上読めるようになることを目標とするが、修了条件としない。 ・ 本コースの修了条件は2014年入門コースと異なる。進級のため、出席率は70%以上、会話テストの結果は60%以上の課題項目が達成できることを修了条件とする。

3.2 コースの概要

2015年入門コースの時間数は、週1回180分の授業を1学期15回行い、1学期間で「かつどう」編と「りかい」編を終わらせた。また、本コースは、進級のために日本語を使って最低限のコミュニケーションができるようになることを目標としており、2014年入門コースの到達目標とは異なる。本コースの基本情報は、表2の通りである。

表2：2015年入門コースの基本情報

実施コース名	まるごと日本語入門コース (A1レベル)
期間	2015年3月10日～6月30日
授業時間	90分@1コマ、1回2コマ(180分)、週1回×15週=15回(14:00～17:00)
授業担当講師	報告者
1クラスの学習者数	11人
学習者の属性	性別：男性3人 女性8人 年齢：20代1人、30代8人、50代1人、60代1人 職業：大学生1人、大学院生1人、講師2人、主婦3人、その他4人

使用教材	『まるごと 入門』『かつどう』編 (市販版)、「りかい」編 (市販版)
到達目標	<p>① 具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできるようになる。</p> <p>② 自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり答えたりすることができるようになる。</p> <p>③ もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け舟を出してくれるなら簡単なやりとりをすることができるようになる。</p>

本コースは未習者を対象としたが、受講生 11 人のうち未習者は 2 人のみであった。既習者 9 人の学習歴の内訳をみると、3 人は大学や民間の教育機関でそれぞれ 1 か月、6 か月、1 年であった。1 人はソウルセンターで 2014 年入門コースの修了者 (当時、未習者) である。5 人は独学で、そのうち 2 人は初級教材で文字が読める程度、もう 1 人はケニア人で 2 週間日本でのホームステイの経験があり (現在、韓国の大学院に在学中)、もう 1 人は 3 か月以上の日本滞在経験があった³⁾ (1 人は 1 回目で途中辞退したため詳細不明)。

大学や民間の教育機関での学習歴を持つ 3 人のうちの 1 人は、大学で 1 年間 (約 40 年前) 学習し読み書きができるレベルではあるが、体系的に勉強したいと強く希望していた。他の 2 人も 15 年ほど前に少し勉強した経験があるだけで、ほぼゼロに近いと強く主張していた。独学経験のある 3 人は、学習途中で学習方法が分からずあきらめたという人が多かった。また、未習者 2 人を含めて受講生全員は、日本旅行の経験があった。

受講生の学習動機は、「日本旅行の経験がきっかけになった」2 人、「日本語の勉強のため」2 人、「仕事のため」1 人、「日本が好き」1 人、「日本旅行を計画している」1 人、その他 4 人であった。開講時の受講生数は 11 人で、終了時の修了者数は 9 人であった (2 人は 1 回目で途中辞退)。

3.3 授業内容

2015 年入門コースでは、「かつどう」編・「りかい」編 (市販版) を使用し、1 課から 18 課まで学習した。学習項目から「読む・書く」Can-do 項目は省略した (詳細は 3.4 節を参照)。表 3 は、2014 年入門コースと 2015 年入門コースの授業内容を示したものである。

表 3 : 2014 年入門コース (左側) 及び 2015 年入門コース (右側) の授業内容の比較

	授業内容	
	2014 年入門コース	2015 年入門コース
1 回目	・オリエンテーション ・トピック 1「にほんご」(第 1 課・第 2 課)	・オリエンテーション ・トピック 1「にほんご」(第 1 課・第 2 課)
2 回目	・トピック 1 の確認<かつどう編> ・トピック 2「わたし」(第 3 課・第 4 課)	・トピック 1 の確認<かつどう編> ・トピック 2「わたし」(第 3 課・第 4 課)
3 回目	・トピック 2 の確認<かつどう編> ・トピック 3「たべもの」(第 5 課・第 6 課)	・トピック 2 の確認<りかい編> ・トピック 3「たべもの」(第 5 課)

4回目	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック3の確認<かつどう編> ・トピック4「いえ」(第7課・第8課) 	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック3の第5課確認<りかい編> ・トピック3「たべもの」(第6課)
5回目	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック4の確認<かつどう編> ・トピック5「せいかつ」(第9課・第10課) 	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック3の第6課確認<りかい編> ・トピック4「いえ」(第7課・第8課)
6回目	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック5の確認<かつどう編> ・トピック6「やすみのひ」(第11課) ・会話テスト1「トピック1～5」 	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック4の確認<りかい編> ・トピック5「せいかつ」(第9課)
7回目	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック6「やすみのひ」(第12課) ・トピック6の確認<かつどう編> ・トピック7「まち」(第13課・第14課) 	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック5「せいかつ」(第10課) ・トピック5の確認<りかい編> ・復習
8回目	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック7の確認<かつどう編> ・トピック8「かいもの」(第15課・第16課) 	<ul style="list-style-type: none"> ・会話テスト1「トピック1～5」と振り返り ・文字学習(ひらがな、カタカナ)
9回目	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック8の確認<かつどう編> ・トピック9「やすみのひ」(第17課・第18課) 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字の確認(ひらがな) ・トピック1の確認<りかい編> ・トピック6「やすみのひ」(第11課・第12課)
10回目	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック9の確認<かつどう編> ・会話テスト2「トピック6～9」と振り返り ・質疑応答、アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> ・トピック6の確認<りかい編> ・トピック7「まち」(第13課・第14課)
11回目		<ul style="list-style-type: none"> ・トピック7の確認<りかい編> ・トピック8「かいもの」(第15課・第16課)
12回目		<ul style="list-style-type: none"> ・トピック8の確認<りかい編> ・トピック9「やすみのひ」(第17課・第18課)
13回目		<ul style="list-style-type: none"> ・日本人講師との会話⁽⁴⁾ (トピック6、トピック7「Can-do」の復習)
14回目		<ul style="list-style-type: none"> ・トピック9の確認<りかい編> ・振り返り ・文字テスト及び会話テスト2「トピック6～9」
15回目		<ul style="list-style-type: none"> ・総まとめ ・質疑応答、アンケート

表3の中で、太字・下線部のハイライト部分は、2015年入門コースで新たに取り入れた内容である。また、太枠の部分は1回の授業の進め方を2014年入門コース(2.2節を参照)と2015年入門コース(3.4節を参照)を比較するために取り上げたものである。両コースの授業内容で大きく異なる部分は、「文字指導の導入」「確認時間の使用教材の変更」「コース実施期間の延長」である。

全体的な構成としては、基本的に毎回1つのトピックを終わらせるようにしたが、トピック3とトピック5は課ごとに分けて実施した。それは、2014年入門コースの結果から、「身近なトピックで話しやすい」「実際の場面で使ってみよう(トピック3)」、「数字や新出語彙量が多い(トピック5)」という学習者の反応を考慮したためである。

毎回の授業の「確認」(30～60分間)には、文字学習や文法項目を定着させるため「りかい」編を使用した。「りかい」編を用いた「確認」は3回目の授業(トピック2の確認)から実施

した。

1回目の韓国語によるオリエンテーションでは、『まるごと』のコンセプトを強調し、文法説明は「確認」のみで「活動」には行わないことを説明した。それは、2014年入門コースの授業では学習者から文法項目の質問が多かったためである。また、トピック1の授業では、ローマ字表記の読み方を説明するのみで、「文字指導」は実施しなかった。それは、2014年入門コースの成果からも分かるように、発音の観点から韓国人学習者には「ローマ字表記」がより効果的だと考えられるためである。特に、発音の誤りが目立つ既習者には「ローマ字読み」を意識するよう注意した。

「文字指導」は8回目の中間テスト後に取り入れ、「まるごとプラス」サイト (<http://marugotoweb.jp>)、フラッシュカード、練習帳などを利用して行った。「文字の確認」は9回目に行い、授業始めの30分間「平仮名」のみで「カルタ」ゲーム形式を利用して実施した。確認では半数以上の学習者は正しい文字を選べることができた。「確認」では「りかい」編のトピック1を用いて行った。

文字テストは、最終的な文字学習の確認のために14回目の期末のみに実施した。「かつどう」編から「平仮名」の短い文章を選び、60%以上読めるようになることを目標とした。また、会話テストの形式は2014年入門コースとほぼ同じである(2.2節を参照)。

3.4 授業の進め方

毎回の授業は、「かつどう」編をベースにし、授業の始めの「確認」(30~60分間)、授業の終わりに「生活と文化」の流れで進めた。本コースの授業の進め方を、2014年入門コースと同じ12回目の授業をサンプルとして図2に示した。

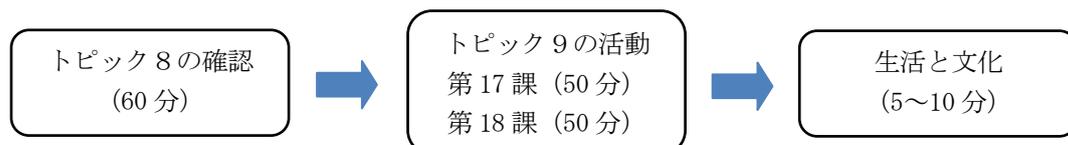


図2 2015年入門コースの授業の進め方 (12回目の例)

図2のように各回の授業は、前回トピックの「確認」、今回トピックの「活動」及び「Can-doチェック」、「生活と文化」の順に行った。各セッションの間は5~10分の休憩時間を入れ、トピックによって時間の調整が必要な部分もあった。

まず、「確認」は、活動前の準備段階として前回トピック終了後に、学習者に「りかい」編を自宅で練習してくるよう指示しており、「確認」にはスライドを見ながら全体で共有しながら進めた。文法説明は、学習者が理解できなかった場合や質問があった場合のみ補足説明を行い、課によっては会話例をペアで発表する時間もあった。しかし、コース後半になるとローマ字ル

ビ付きのものは会話例のみであり、文字が読めない学習者は自宅で課題が出来なくなってきた。カリキュラム作成時は「確認」を30分としたが、トピック6以降はイラストの手助けがない場合、全て音声を聞きながら答えをチェックしたため、60分程かかってしまった。また、「読む・書く」の学習項目については、事前に既習者には自律的に練習するように促し、教室活動では確認しないと説明した。表4は、12回目「確認」の進め方を示したものである。

表4：2015年入門コースの「確認」授業の具体的な進め方（12回目：トピック8の例）

「りかい編」の内容	実際の授業で工夫した内容
【トピックの導入】	
・15課で学習したことを確認する（写真と内容質問）	
【文字と言葉】	
・15課で使った文字と言葉を練習する（イラスト付き）	
【文字を書く】	→ 「文字を書く」活動を省略する
・音声を聞いて「ひらがな・カタカナ」で書く	
【漢字を読む】	→ 「漢字を読む」活動を省略する
・漢字の読み方を覚える	
【会話と文法】	
・モデル会話を聞いて、文法と結び付けて理解する	
・文の構造やルールを理解する	→ 「文の構造やルール」を韓国語で説明する
【会話と文法を確認する】	
・音声を聞く前に文脈／場面の中で、会話と文法を結び付けて練習する→音声を聞き答えをチェックする	→ 「音声を聞いた後」答えをチェックする
【読解】：15課の内容に関連した短い文章を読む	→ 「文章を読む」活動を省略する
【作文】：15課の内容に関連した短い文章を書く	→ 「文章を書く」活動を省略する
【日本語チェック】	
・授業後、場面に合った日本語の使い方が分かったか、自分でチェックをする	→ 「日本語チェック」活動を省略する
↓	↓
・16課は15課の内容と同様	・16課は15課の確認内容と同様

表4の左側は「りかい」編の内容を順に示し、右側は実際の授業で工夫した内容を矢印（→）で表示した。「確認」は、ほとんど「りかい」編の提示順に沿って行ったが、「読む・書く」活動と「日本語チェック」は省略した。

次に、「活動」は、ほとんど「かつどう」編の提示順に沿って行った。表5は、2015年入門コースの12回目「活動」の具体的な進め方を示したものである。

表5：2015年入門コースの「活動」授業の具体的な進め方（12回目：トピック9の例）

「かつどう」編の内容	実際の授業で工夫した内容
【トピックの導入】	
・扉の写真を見て、トピック内容を推測する→背景知識の活性化	

案（4.3 節）について考える。

4.1 テストの結果

2015 年入門コースのテストの結果をみると、「文字テスト」の結果では、受講生 9 人全員が「平仮名」を 60%以上読むことができた。また、中間と期末の「会話テスト」の結果では、1 人の受講生を除いて、ほとんどの受講生が 80%以上の質問課題が達成できた。

表 6 は、中間会話テストの結果について、2014 年入門コース 9 名（開講時未習者 2 名を含む）と 2015 年入門コース 9 名（開講時未習者 2 名を含む）の回答例を比較したものである。

表 6：2014 年及び 2015 年入門コースの中間会話テストの回答例

質問：「いつも朝ごはんを食べますか」	
2014 年入門コース（9 人 ⁶⁾ ）	2015 年入門コース（9 人）
「たべます」（2 人）	「はい、たべます」（3 人）
「ときどきたべます」（2 人）	「はい、あさごはんを食べます」
「いいえ、たべません」	「はい、いつもあさごはん、たべます」
「はい、いつもたべます」	「いいえ、あさごはんはたべません」
「はい、いつもあさごはん、たべます」	「あまりたべません。ひるごはん、じゅうにじごろたべます」
【課題が達成できなかった例】	【課題が達成できなかった例】
「はちじ、あさごはん、たべます」	「あさごはんをはちじごろ、たべます」
「はちじごろたべます」	

表 6 は、質問「いつも朝ごはんを食べますか」に対する受講生の回答（音声）を文字化したものであり、2015 年入門コースの中間会話テストの質問は、2014 年入門コースのものと同じである。2 つの入門コースのテストの結果を比べると、「2015 年入門コース」の方が、助詞の使用や文構造の作成などの正確さが増している。また、中間・期末会話テスト全体を比べても、ともに 2015 年入門コースの方が 2014 年入門コースより課題達成度が高かった。それは、「文字指導」の導入、「りかい」編の使用、「コース期間の延長」などの成果として、文法項目を含めて学習項目の定着度が改善できたと考えられる。

4.2 学習者の反応

本コースの終了時に実施したアンケート調査の結果（資料 2 を参照）をみると、「教材」に関する受講生からの評価は概ね高く、「授業全体の進め方」についても、受講生全員が満足していた。「確認」の必要性について、ほとんどの人が必要と回答した。「文字指導をコース最初から受けたかったか」については、「文字学習」の必要性は感じるが、導入時期については受講生によって異なっていた。「日本語学習の継続」に関しては、今後も学習を続けたいと肯定的な反応がほとんどであった。

さらに、アンケート調査後、1 人 15 分程度のインタビュー調査を行った（参加者 7 人）。イ

インタビュー調査では、1) 文字学習、2) 「りかい」編の使用、3) 「確認」などについて受講生の詳しい意見をたずねた。インタビュー調査の結果をみると、まず、「文字指導」に対する学習者の反応は大変良かった。受講生からは、「一人では覚えられなかったが、コース後半には読める文字が増えた」という声が多かった。「文字指導」の導入時期に関して、最初からはしない方が良いと答えた受講生のほとんどは「聞く」ことに集中できるためと答えた。次に、「りかい」編の使用については、6人が自宅で復習のために使っていた。他の1人は「りかい」編を全く使わず「まるごとプラス」のみ使用していたが、その受講生の期末会話テストの結果は課題達成できていない項目が多く、6人に比べ学習項目の定着度が低かった。また、6人は「りかい」編を使用することで「文字学習や聞く練習に役立った」「平仮名」を読むスピードが良くなった」という肯定的な反応が多かった。最後に、「確認」については、6人が「必要だ」と答えた。その理由としては、「復習できる」「語彙や会話練習に役立つ」「文法・文型の理解ができた」などの感想が多かった。実際に本コースの授業を2014年入門コースの授業様子と比べると、学習者から文法についての質問が減っていた。また、受講生の多くは「確認」に行った「会話例の発表」が役立ったと答えた。そのうち1人は「活動」では教科書を見ながら練習したが、「確認」では考えながら会話できて良かった」と答えた。しかし、1人は「復習より新しい項目をたくさん練習したかった。確認は質問にしても大丈夫だと思う」と答えた。その受講生は一人で復習が出来ていたので、授業中に「確認」を取る必要がないと感じているようであった。

2014年入門コースから継続受講している受講生(50代、女性)には2014年入門コースと本コースを比較して感想をたずねた。「文字学習」について、「2014年入門コースでは、一人で復習するのが難しかったが、今回文字学習ができてとても良かった。特に、日本旅行の時、初めて看板が読めて嬉しかった。また、ローマ字が平仮名で確認できて面白かった(「gakkoo」など)」と答えた。「りかい」編の使用については、「音声を聞きながら学習するので、文字に対する恐怖感がなくなった。文法練習もできてよかった。会話練習にも役立った」と回答した。「確認」は、「文字が読めない場合は、必ず必要だ」など肯定的な評価が多かった。

本コースの成果として、「文字指導」の必要性とともに、発音の観点から「ローマ字読み」の有効な活用により韓国人学習者の日本語発音の定着に繋がることを確認できた。また、「りかい」編を用いた「確認」は学習者の文字学習及び学習項目の定着に役立つことが分かった。

4.3 2015年入門コースの課題及び改善点

2015年入門コースの実践からは幾つかの課題も見つかった。特に、本コースの新たな試みとして取り入れた「りかい」編の使用について補完すべき問題点が多かった。ここでは、本コースの実践から分かった問題点とその改善点を提案する。

まず、「りかい」編の使用について、一つ目は、「文字」提示の問題点である。「文字」が定着

していない学習者（2人）は、「りかい」編のトピック6からローマ字ルビがなくなると、家での復習ができず「確認」の練習だけになった。そのため、「確認」にはイラストの助けがない場合、全て音声聞きながら確認し、予想以上の時間がかかってしまった。「文字」が自由に読めない学習者のために、教師は「りかい」編のトピック6以降ローマ字を併記したスライドを準備し、音声を聞かずに内容確認ができるように、今後改善する必要がある（改善案①）。

二つ目は、「語彙学習」の問題点である。本コースでは、毎回トピック終了後、次回の「確認」の準備として学習者に「りかい」編の復習を促した。しかし、「りかい」編には「語彙帳」と「かつどう」編で扱っていない語彙が含まれているため、事前に教師の説明がないと、学習者は意味が分からず復習できない場合が多かった。「語彙学習」と復習のために、教師は韓国語訳付きの「各課の語彙リスト」を作成する必要がある。語彙の範囲は「りかい」編の内容をカバーするもので、各トピック終了後にトピック別に配布することを考える。「語彙リスト」の取り扱いについては、語彙の意味を覚える必要はなく、ローマ字の読み方を確認する程度で良いことを事前に十分注意しておくことが重要である（改善案②）。

三つ目は、「文法学習」の問題点である。教師による文法説明を「確認」のみで行ったが、「りかい」編には「かつどう」編で扱っていない文法項目も含まれ、学習者は復習できない場合があった。そのため「確認」の「文法・文型」項目の質疑応答が多くなり、学習者が会話例をペアで発表する時間が取れないときもあった。そのため、今後「文法説明」の時間を設け、各トピック終了後に実施する必要がある。毎回トピックの教室活動後に「りかい」編の「会話と文法」をみることは、理解した文の構造やルールを確認し学習項目の定着にも役立つと思われる（改善案③）。

四つ目は、「韓国語使用」が挙げられる。授業前半に設けた「確認」で文法説明や質疑応答など韓国語使用場面が多かったため、続く「活動」で「話す」活動への切り替えが困難であった。また、教科書の指示表現を韓国語で説明する場面も多かった。教師の韓国語使用を減らすため、各スライドに韓国語訳付きの指示表現を提示する必要がある。また、授業前半に「確認」、授業の終わりに「文法説明」を設け、授業全体で「話す」活動を増やすことも重要である（改善案④）。

次に、「生活と文化」については、2014年入門コースと同様、本コースでも時間の都合上、十分話し合うことが出来なかった。学習者からは依然として日本の生活と文化に関心が高いことが確認できた。その改善案としては、コースの中間（トピック1～5）と期末（トピック6～9）の振り返り時間を利用し、まとめて話し合う時間を設けることを考える。方法としては、毎回の授業の終わりに、教科書の「生活と文化」（韓国語訳付き）のシートを作成し、疑問点や感想など日本文化の体験を韓国語で書かせるようにするものである。振り返りにはグループで話し合い、グループごとに日本文化体験を発表させるものである（改善案⑤）。

5. 今後の課題及び展望

ソウルセンターではコース運営上、授業時間が週 1 回 180 分 15 回と制限されている。このような条件の下で、『まるごと』のコンセプトを生かした、より良い授業とは何か。

ここでは、2014 年入門コースと 2015 年入門コースの取り組みの成果を踏まえ、4.3 節で述べたような改善案を取り入れたコースデザインを考える（図 3 を参照）。

まず、「文字指導」に関しては、発音の観点から「ローマ字読み」が学習者の日本語発音の定着に有効であることが確認できたため、「文字指導」はコース中間に導入する。また、「文字学習」の定着のため、「りかい」編を活用する。トピック 6 以降はローマ字併記のスライドを準備し（改善案①）、語彙リストを作成する（改善案②）ことにより、学習者の文字や語彙学習に対する負担を軽減する（図 3 の教室外の学習内容②、③）。

次に、「文法学習」の定着のために、「文法説明」を新たに設ける（改善案③）。「文法説明」は「りかい」編を使用し、できる限り韓国語使用を最小限にするため、取り入れる順番を「活動」の終了後にし（改善案④）、「聞く・話す」活動を中心とする（図 3 の教室活動の学習内容③）。

最後に、「生活と文化」は、時間的制限を克服するために、コース中間と期末の振り返り時間を利用する（改善案⑤）。

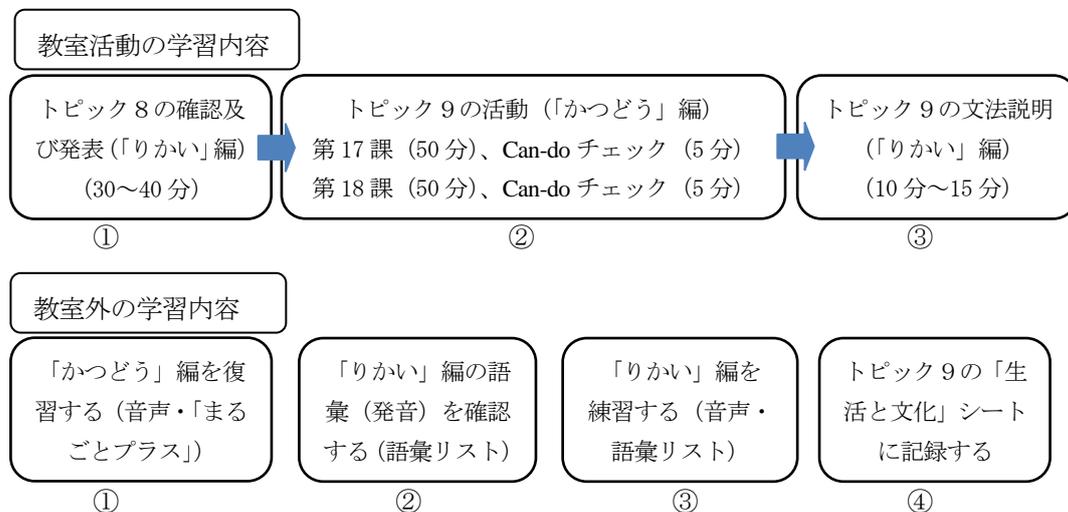


図 3 入門コースの授業の進め方及び学習内容の提案（トピック 9 の例）

図 3 は、「入門コース」の 12 回目の授業を例として、「教室活動」の進め方（上段）及び「教室外活動」（下段）の学習内容を示したものである。

ソウルセンターでは、2015 年後期（2015 年 9 月～12 月）に「まるごと日本語初級 1 コース（A2）」（以下、「初級 1 コース」）を実施した（報告者担当、受講者数 20 人（2014 年入門コース修了者 4 人、2015 年入門コース修了者 7 人（リピーター 1 人を含む）、新規受講生 10 人）。

「初級1コース」の授業の進め方は、図3に示した「教室活動」の流れと同様であり、学習者には「教室外の学習」を促した。「初級1コース」では、次回のトピックの「語彙リスト」を配布した点が図3と異なる。実践の結果、まず「確認」では「語彙や文法」の質問が明らかに減るようになり、学習者の会話例の発表時間が確保できた。また、発表時間では自分自身の状況に合わせて会話を応用する学習者も多くみられ、学習項目が理解できたと考えられる。次に、「活動」では「聞く・話す」活動が充分にできるようになり、Can-doチェックの時間も確保できた。また、「活動」で学習項目の理解が充分に出来たためか、「文法説明」では質問が少なく、10分で終わらせるときが多かった。最後に、「生活と文化」を振り返りの時間に実施した結果、学習者はグループごとに活発に話し合い、積極的に発表するなど肯定的な反応がみられた。今回の改善案は「初級1コース」ではその有効性が確認できたと考えられる。今後の課題は、これらの改善案を次回の「入門コース」で取り組むことであり、ポートフォリオの活用にも取り組んでいきたい。

2015年入門コースの試みや今後の改善案などは、両言語ができる教師が不可欠な条件となる。また、上記の提案は文法や文構造など、日本語と言語学的特徴が類似している韓国人学習者であるからこそ実現可能なことかもしれない。しかし、日本の文化を取り入れた「聞く・話す」活動中心の講座で学習者の母語や媒介語を適切に使用すること、学習期間を増やすことなど、教師がどのような工夫をすればいいかという点について、他の拠点でも参考になるものと考えられる。

[注]

- (1) 中上級以下のクラスは、すべて総合型の授業になり、今までの上級者向けのクラスは、技能特化型（スピーチ、聞く、読むなど）の授業の形で「上級者向けの実践コース」として残した。
- (2) 中級・中上級に関しては、これまで通り前期・後期ともに開講している。
前期：入門、初級2、中級、中上級／後期：初級1、初中級、中級、中上級
- (3) 3か月以上の日本滞在経験者1人は初日に口頭テストを行った結果、入門レベルの受講は適切ではないと判断し、他のレベルに移動するように勧め、コースを辞退してもらった。
- (4) 2015年入門コース13回目の授業は、報告者の不在のため取り入れたもので、今学期限りである。
- (5) 修了者10人のうち、中間テストに参加した9人の結果である。

[参考資料／参考サイト]

松崎寛(1999)「韓国語話者の日本語音声－音声教育研究の観点から－」『音声研究』3-3, 26-35.
国際交流基金「まるごとプラス(入門A1)」サイト<<http://marugotoweb.jp/>> (2015年4月28日参照)

